石クリ通信

７月号

新しい医療

院長　石川　悟

ヒトのゲノム解析が予想以上に早く終了し、遺伝子の変異と病気との関連が明らかになりつつあります。各個人の遺伝子情報を考慮して、診断や治療に生かそうと考えるのは自然の流れで、劇的に医療が進歩すると考えられました。ところが実際に遺伝子解析をして行くと、あまりにもいろいろパターンがあって、とても一人ひとりに合った治療を考えるのはお金がかかり過ぎるとわかってきました。衣類で例えると、今までは既製服しかなかったのに、オーダーメイドの服を作るのは、お金がかかり過ぎるということです。

そこで出て来たのが、オバマ大統領が一般教書演説で行った、Ｐｒｅｃｉｓｉｏｎ　Ｍｅｄｉｃｉｎｅ（日本語で精密医療あるいは適格医療などと言われます）。ゲノムの情報で疾患や患者をサブグループに分け、治療の戦略を立てようというものです。オーダーメイドではないが、単なる既製服でもなくＳ、Ｍ、Ｌなど大きさの違うものを揃えようというところです。アメリカは人のゲノムを収集解析する研究に対して多額の予算を組みました。日本の健康保険診療に入って来るのは何年も先の話ですが、医療は確実に進歩しています。

台湾のおもしろい場所

事務　森　絵里子

今年の３月から茨城空港「茨城―台湾」便がスタートし、５月に早割を使い往復８５００円の安さで行ってきました。２度目の台湾なので、ザ・観光地の台北だけでなく、新幹線に乗って台湾第三の都市台中市まで足を運んでみました。このカラフルな場所は「虹彩村」と呼ばれ、中国大陸の内戦によって移住した人々の集合住宅として使われていました。２００８年、住民であるひとりのおじいさん（当時８６歳）が「暇だったから」という理由で壁に絵を描き始め、このようなアートな村が完成しました。都市開発のために取り壊しの危機もありましたが世界各国のファンの強い要望もあり、文化公園として保存される事になりました。現在も数名の住人がいるそうで、私が行った時は会えなかったおじいさんも生きていれば９６歳です、亡くなったという話を聞かないので今もご健在かも！オールカラフルでどこも見ても飽きません。おじいさんの抜群のセンスは私の旅をとても良いものにしてくれました☆

オペラ座の怪人に魅せられて

看護師　髙山　早苗

私が初めて劇団四季のオペラ座の怪人を観たのは四季劇場のない時代、日生劇場だった。１９８６年にロンドンで初演されたこのミュージカルは、それからわずか四半世紀のうちに「世界で最も多くの人が観たミュージカル」という王座についた。１９８８年にブロードウェイ進出を果たしたオペラ座の怪人の日本初演は奇しくもブロードウェイと同じ１９８８年。日本ミュージカル史上類をみないスケールの大きな舞台は、またたく間に社会現象となりロングランを続け、３年前２５周年を迎えた。１９世紀末、パリオペラ座の地下に住む怪人と、怪人に歌のレッスンを受けるコーラスガール、その幼馴染の子爵を巡るストーリーである。豪華な舞台衣装や鮮やかな舞台転換、感動的な音楽、鳥肌のたつようなあの感動を何度も味わいたくて東京での初演から、名古屋、大阪、京都と足を運び私の追っかけ生活は続いた。ライオンキングもいいけれど私はやっぱりオペラ座の怪人が好きだ。いつかまた観に行こうと思う。

夏バテ防止に

事務　久保　直子

暑くなりました…。暑い時のお風呂は、シャワーだけで済ませてしまいがちですが、夏バテ防止には湯船につかる方が良いそうです。そこでオススメなのが「酒風呂」入浴剤の代わりに日本酒をコップ２～３杯入れるだけ。お酒もったいない！と思ってしまうのですが、安い２級酒や栓を開けて香りが飛んでしまったもので十分です。「酒風呂」は血行が良くなり、疲労回復や美肌にも効果があると云われています。私も疲れた時に「えーい、大奮発じゃー！」と、もったいないケド日本酒を入れてお風呂を楽しみます。そして風呂上がりには、冷たいビール☆最高です♪

ふるさと

事務長　石川　都

家族カルテットのアンコールは「ふるさと」が多い。演歌も童謡も好評だが、唱歌「ふるさと」に対する人々の愛着はまた別格のようだ。聴衆と一緒に歌うと、一人一人がそれぞれ故郷に思いを馳せ、懐かしそうに歌っているのがわかる。遠い目をして歌っている人たちの心には、どんな故郷の風景が広がっているのだろうか・・・

私の故郷は、東京の郊外、武蔵野の台地に森の広がる、東京と言っても自然の残る地域であった。晴れた日には秩父の山々や富士山が見えた。まだ麦畑も多く、その間を通って小学校へ通った。それでも日々は町の暮らしで、買物は池袋や新宿、遊びに行くのは豊島園や後楽園であった。夏には千葉の岩井や神奈川の逗子の海に出かけた。両国から機関車に乗り、窓から帽子を飛ばされたり、トンネルで黒い煙が入りこんで大騒ぎをした幼少期の思い出がある。

「ふるさと」を歌うたび、青い山も清き水も、兎も小鮒も実感のないわが故郷を思い、日立で育った子どもたちには、この自然豊かな地が「ふるさと」であることに、なぜかホッとしたりする。

海の日の出来事

看護師　澤田　彰子

七月十八日は海の日ですね。昨年は子供二人を連れ海水浴に出かけました。久しぶりの海水浴で子供たちも大はしゃぎでちょっと遅めのお昼ごはんを食べました。子供たちはまた泳ぎにいったのですが、いつも昼寝をしている私は睡魔に勝てず、つい寝入ってしまいチリチリと焼ける感じがして目を覚ましました。両太ももが真っ赤に焼けていました。家に帰ってから冷やしたのですが時すでに遅しで、腫れと痛み、水疱ができ II 度の熱傷を負ってしまい大変でした。今年はラッシュガードでしっかり日焼け対策をして出掛けたいと思います。

『本末転倒』感は否めない

薬剤師　石川　恵

前にも書きましたが私は昔から相当な本の虫でした。内容は決して高尚なものではないのですが、一度読み始めると続きが気になって何も手につかない。帰り道も歩きながらひたすら読書に夢中、という二宮金次郎のような状態でした。

・・・と、いう話を知人にしていたところ、ふと耳にした興味深い話。「最近の二宮金次郎像は、少々形態が変わっているらしい」それがこの写真です。最近話題の「歩きスマホ」など、何かに集中しながら歩くと危険だ、という意見からだそうです。その言い分はごもっともだと思いますが、本来「仕事をしながらも勉学を怠らなかった象徴」であるこの像。「・・・・働いてなくない？」と思ってしまうのは、私だけでしょうか。

嫁入舟

看護助手　柴田　さち子

水郷潮来あやめまつりに嫁入船がありました。一九九五年頃まではよく目にした嫁入船。祝福ムードに包まれながら嫁入り道具などを乗せて、花嫁は決意を胸に新郎の元へ向かいます。

今は希望者を一般から募集し、抽選で選ばれた新郎新婦によって嫁入船が再現されているそうです。観客一人が「おめでとう」という と周りの人達がおめでとうゝと全員が拍手、花嫁はゆっくりとバージンロードへ向かって行きました。末永く、お幸せに。